

学生大使 実施報告書

氏名:佐藤朱奈

学部・学科(コース)・学年:人文社会科学部・人文社会科学部(人間文化コース)・2年

派遣先大学:ラトビア大学

派遣期間:2025年2月27日~2025年3月13日

1 日本語教室での活動内容

日本語教室は平日の16:10~と17:45~でそれぞれ90分ずつ1日2回行った。大学で日本語を専攻する若者から日本語に興味があり独学で勉強する社会人まで、幅広い年代の方が参加してくれた。なるべく1対1になるようペアを作り、90分という長い時間の中で疲れないよう、こまめに休憩を取り交代しながら授業を行った。ある程度日本語が話せる現地学生とは日本語での会話を中心とした授業を行い、まだ日本語を学び始めたばかりの人とは英語を交えながら、新しい単語の学習や文法の復習を行った。ある程度日本語が話せる現地学生の中には、日本へ留学経験のある方や、日本で仕事をする予定がある方など様々な方がおり、お互いの国についての紹介が中心的なトピックだった。会話の中でわからない単語があったときなどは、英語や翻訳に頼りながらコミュニケーションをとった。なるべく正しい文法で日本語を話すことを心掛けたが、現地学生の中には話し言葉で話す人と文法通り話す人の両方がいたため、人によって対応を変えながら授業を行うのがとても難しかった。単語と文法を中心とした授業においては、英語を活用することが多かったため、うまく自分の言いたいことが表現できない時が多く、英語で日本語を教えることの難しさを痛感した。ラトビアの方は日本人と同じようにシャイな方が多く、積極的に話題を作り自分から話しかける必要があったため、はじめはとても大変だったが、次第にお互い心を開き様々なことを話すことが出来たのでよかったと思う。

2 日本語教室以外での交流活動

日本語教室は夕方からだったため、午前中から日本語教室開始前まで現地学生の方に様々なところへ行った。旧市街地は事前に写真で見た以上に趣があり、旧市街以外の場所も町全体において景観を守ろうという試みが様々なところでみられ、歩くだけでとても楽しかった。ラトビアにはLaimaというチョコレートの会社があり、その博物館においてはチョコレートを実際に作れるだけでなく会社の歴史を知ることができ、戦争下のラトビアの様子も知ることが出来た。また、徒歩圏内に様々な美術館と博物館があり、どこに行ってもラトビアの複雑な歴史を学ぶことが出来た。特に国立ラトビア美術館はとても広く、戦争当時の新聞なども展示されているため、もっとラトビアの歴史に詳しくなってからもう一度訪れたいと思った。さらに、ラトビアのアニメーション映画である『Flow』がアカデミー賞をはじめ受賞したタイミングでもあったため、町の中が作品で彩られており、この映画を現地の映画館で見ることができたのはとても貴重な経験だった。また、音楽の本場でオペラを鑑賞できたことも貴重な経験だった。リガから離れた場所としては、ユールマラとルーングーレ宮殿につれていってもらった。どちらもシーズンオフで観光客が少なかったものの、とてもきれいな場所で、夏にもう一度訪れたいと思った。

3 参加目標への達成度と努力した内容

今回このプログラムに参加するにあたり、私は自分の外国に対する偏見や固定概念を少なくすることを目標にしていた。私は渡航前、ヨーロッパをひとくくりにして考えてしまうことが多く、またその人柄についても、日本よりも冷たい人が多いという認識があった。こうした認識が間違っていることは渡航前からわかっていたものの、実際に訪れて肌で感じるまでは払拭することが出来なかったため、今回はこうした認識を少しでも変化させることが目標だった。実際に2週間生活してみて感じたことは、やはり私の渡航前の認識は狭い視野から生まれたものであり、実際は大きく異なっているということだ。ラトビアの人はとても優しく親切であり、国の歴史的背景からも考えられるようにラトビアと他のヨーロッパの国との違いを大きく意識しているように感じた。私の今までの認識が、ラトビアの人たちにとても失礼な考え方であったということを実際に感じる事が出来たのは、このプログラムに参加して最も大きな収穫だったと考える。また、自分の英語がどれほど通用するかを試すことも目標にしていた。実際に英語を用いて現地学生とコミュニケーションをとってみて、正しい文法を用いる以上に単語力とコミュニケーション力が重要になることを痛感した。現地の人は伝えようとする努力さえすれば意図を汲んでくれることがあるため、ある一定の基礎を学んだあとは正しい文法を用いる以上に伝えようとする意志が重要になるということを実際に学ぶことができた。

4 プログラムに参加した感想

今まで誰かに日本語を教えるという機会がなかったため手探り状態だったが、教えるという行為を通して自分自身の日本語の使い方を見直す機会にもなり、とても有意義な時間だった。自分はあまり外向的な性格ではないため、日本人と性格の似ているラトビアの人との交流は不安が大きかった。しかし、ラトビアの人は想像以上に優しく、声をかければ笑顔で受け入れてくれたため、普段以上に積極的に行動出来たと思う。また、やはり英語がとても重要になることを実感できたのも、とてもいい経験だった。今までの座学での勉強のみでは、英語の必要性をあまり感じられず、また自分の英語がどこまで通用するかも分からなかった。そのため今回のプログラムにおいて英語でのコミュニケーションを多く取れたことは、英語の重要性を再確認し、英語への苦手意識を変えるととてもいい機会になったと思う。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

今回の経験を通して、やはり英語のスピーキング力をもっと向上させたいと考える。聞き取りができて、上手く自分の言葉を英語で表現することが出来ず、もどかしい場面が多々あったため、スピーキング力を養いたいと思う。また、今回初めて海外へ行ったことで、自分の中で視野や価値観がかなり広がったように感じるため、常に自分の中に偏見や固定観念があることを理解した上で今後は行動したいと思う。そして、文化や価値観の違いの背景には様々な要因があり、そのひとつに国の歴史的背景があることを今回明確に理解することが出来たため、まずはラトビアの歴史についてもっと知りたいと考えている。またこれについては今後訪れる国においても同様であり、日本との表面的な違いを捉えるだけでなく、その違いの背景に何があるかをしっかりと知る努力が必要になると思う。

6 現地での活動写真

写真1

ルーンダーレ宮殿



写真2

Laima の博物館で作ったチョコレート



写真 3

ユールマラの海の様子



写真 4

House of the Blackheads

